

金正恩の軍隊改革

金正日時代、最高指導者の軍隊に対するおもな関心は軍隊を社会の見本にすることにあり、軍隊の作戦指揮の領域については権限をもっていたものの、具体的に踏み込んだことはほとんどなく、軍隊の人事を大きく変更したこともなかった。朝鮮は、2003年4月30日に核武装化に入ることを発表し、2006年10月9日に最初の核爆発実験を実施したが、各種・各級部隊の戦略、戦術、訓練などに関して大きな変化はみられなかった。

これに対して、2011年12月17日の金正日の死去により、30日に人民軍最高司令官の地位に就いた3代目最高指導者の金正恩は軍事に関して、作戦指揮の領域に強い関心を示した。金正恩は金日成軍事総合大学を2006年12月24日に卒業した軍人であった（『朝鮮新報（日本語版）』2012年11月5日）。2013年2月2日発の朝鮮中央通信は、党中央軍事委員会拡大会議が開催され、「軍事力の強化で一大転換を起こすことについての問題と組織問題」が討議され、金正恩が「綱領的な指針となる重要な結論」を述べたと報道した。この報道は、金正恩がこの会議で自身の核戦略と軍事政策を示し、2代目金正日とは大きく異なる方向に動き出したことを示しているものの、金正恩の発言の具体的な内容は公表されていない。

これまでの日本の研究では、金正恩時代の軍事に関してもに核兵器およびミサイルの開発の対外政策上の意義を論じることが行われたが（道下 2013; 朴正鎮 2015）、先代の軍事政策からの連続と変化にはほとんど注意が向けられなかった。

そこで、本章では公式に報道された金正恩の行動から軍事に関する先代の最高指導者との政策の違い、変化を見出すことを試みる。

2003年3月20日に米軍の空爆によってイラク戦争が始まると、翌21日に朝鮮外務省は、この戦争がアメリカなどによる「重大な主権侵害行為」であるとし、それはすでに1990年代の大量破壊兵器に関する査察に始まっていたと位置づけた（『朝鮮中央通信』2003年3月21日発）。これは、朝鮮では大量破壊兵器に関する査察そのものが、アメリカが他国を武装解除するための手段であると認識されたことを示していた。さらに、朝鮮外務省は、4月30日、「必要な抑止力」をもたざるを得なくなったと発表し、核兵器の開発に乗り出す意思を示した（『朝鮮中央通信』2003年4月30日発）。これは、実際に朝鮮で核兵器の開発が進められていたか否かには関係なく、朝鮮労働党は、核兵器開発疑惑そのものの継続がアメリカにとって自国を攻撃する名目になると認識したこととともに、むしろ公に核兵器を保有すればアメリカが攻撃に躊躇するであろうと判断したことを示していた。

ただし、当時の党と政府は、核兵器の開発と保有自体が抑止力になると認識していた。2003年6月9日に、党と政府を代弁する朝鮮中央通信社は論評という形で、「我々が核抑止力をもとうというのは、誰かを威嚇あるいは恐喝するためのものではなく、将来的な展望として通常兵器を縮小して人的資本と資金を経済建設と人民生活に回そうとするところにある」と述べていた。すなわち、核保有は社会の軍事的負担を減らしてその分、経済部門の投資が増えることになるという認識が社会的に受け入れられていた。

当時の最高指導者金正日は核保有を実現した後もこの認識を変えなかった。2006年10月9日に原子爆弾の爆発実験が成功すると、翌2007年4月4日に金正日は党と国家の経済機関の責任幹部たちに対して、核保有国になったことで防衛力が整ったという認識を示し、「今からは経済建設に力を入れて人民生活をはやく向上させなければなりません」と述べた（『金正日選集23（増補版）』2014, 103-104）。そこでは、核抑止には、核兵器を保有するに至った次の段階として、敵側が攻撃を躊躇するに足るまでその核兵器の存在を印象づける工程が必要になるということとは、ほとんど認識されていなかったといえる。

実際に抑止の対象であるアメリカは、朝鮮の核兵器およびミサイルの能力に関

して、北東アジア地域の不安定要因であり、核不拡散体制に対する脅威であるとししか認識していなかった。ホワイトハウスが2015年2月に発表した国家安全保障戦略報告書でも、この認識が示され、アメリカに対して直接的な攻撃の可能性については言及されなかった（United States. President 2015）。したがって、朝鮮の核兵器はアメリカに対する抑止力として機能していなかったといえる。

2011年12月30日に人民軍最高司令官に就任した金正恩は先代と違い、中途半端な抑止力に満足していなかった。それはすぐに抑止の論理を追求する動きに出たことが示している。2012年4月14日に開館した人民軍武装装備館には長距離ミサイルが展示された。そして、翌15日に実施された軍事パレードでは、長距離ミサイルとみられるものを含む各種ミサイルを積んだ移動式車輛たちが行進した。2013年からはミサイルの試験発射や訓練を頻繁に実施し、長距離ミサイル開発の意思と能力を内外に印象づけるようになった。また、2015年5月8日には潜水艦発射ミサイルの試験発射が実施され、翌日の『労働新聞』に「北極星-1」と表示されたミサイルの写真が公表された。この発表によって、ミサイル開発の種類が多岐に及ぶものであることが知られるようになった。アメリカ側もようやく朝鮮によるこうした核打撃能力の増強を意識するようになった。2016年5月26日にオバマ大統領は朝鮮の核打撃能力について、アメリカに対する脅威でもあると述べるに至った（『朝日新聞』2016年5月27日）。

そして、2016年にはアメリカに対する核打撃能力が完成する段階に入った。6月22日にはグアムに対する打撃が可能だと推定される中長距離ミサイルの高角度試験発射が実施された。このミサイルは「火星-10」であると発表され、ミサイルのシリーズが「火星」であることが明らかになった。9月9日には核弾頭用原子爆弾の実験が実施された。2017年7月4日にはアラスカに到達するとみられる大陸間弾道ミサイル「火星-14」の発射試験、9月3日にはミサイルに装着する水素爆弾の実験、11月29日にはアメリカ全土を射程に収めた大陸間弾道ミサイル「火星-15」の試験発射が行われ、「国家核武力の完成」とされた（『労働新聞』2017年12月1日）。アメリカ側は、2017年12月に発表された国家安全保障戦略報告書で、朝鮮が「アメリカ人を数百万人殺すほどの能力を追求している」と記したように、朝鮮の核およびミサイルの開発を脅威として真剣に受け止めるようになった（United States. President 2017）。なお、これら「火星」シリーズは2022

年3月から「火星砲」と呼ばれるようになった。

核戦力の可視化と並行して、さまざまな戦闘の種類に対応する能力の可視化も進められた。従来、軍隊の状況に関する公式の報道は最高指導者の軍部隊への訪問がそのおもなものであり、せいぜい当該軍部隊内での訓練に言及されるくらいであった。金正恩時代に入ると、伝えられる訓練の様子に広がりが出るようになり、これまで登場しなかった種類の訓練が報道されるようになった。表6-1は最高司令官に就任してから2020年までの金正恩の軍部隊に対する現地指導と訓練の指導の動向を示したものである。そこでは金正日時代と違い、金正恩は訓練そのものを指導していることが目立つ。

表6-1 金正恩の軍部隊訪問および訓練指導(2012年1月～2020年4月)

2012年	1月1日	第105タンク師団
	1月18日	第169軍部隊(呉仲治7連隊称号授与)
	1月20日	第354軍部隊(空軍, 呉仲治7連隊称号授与), 第3870軍部隊(呉仲治7連隊称号授与)
	1月21日	第425機械化歩兵師団(第671軍部隊)
	1月27日	第378軍部隊(空軍, 呉仲治7連隊称号授与)
	1月30日	第1017軍部隊(空軍, 呉仲治7連隊称号授与)
	2月6日	東海艦隊(第597軍部隊)指揮部および管下第790軍部隊, 第158軍部隊, 魚雷艇1307号
	2月7日	第7軍団(第324軍部隊)指揮部
	2月21日	第842軍部隊
	2月25日	第4軍団司令部管下軍部隊(前線西南部)
	3月2日	戦略ロケット司令部
	3月3日	板門店
	3月9日	第123軍部隊, 椒島防御隊(西海岸)
	3月14日	陸海空軍合同打撃訓練
	4月4日	第155軍部麗島防御隊(東海岸)
	4月5日	第155軍部隊(海軍)
	4月27日	第6歩兵師団(現: 第655軍部隊)
	5月3日	航空・反航空軍(空軍司令部)指揮部
	5月23日	第1501軍部隊
	8月5日	第552軍部隊管下区分隊, 第1017軍部隊(空軍, 呉仲治7連隊称号授与)
8月23日	第4302軍部隊管下柿の木中隊(東海岸)	
8月27日	第1軍団第894軍部隊(呉仲治7連隊称号授与), 軍団指揮部(前線東部)	
8月28日	第318軍部隊(前線東部)	
10月6日	国家安全保衛部	
10月29日	金日成軍事総合大学	
11月18日	後方総局(第534軍部隊)直属騎馬中隊訓練場(現: 美林乗馬倶楽部)	
11月19日	国家安全保衛部	
2013年	2月20日	第323軍部隊(航空陸戦旅団, 呉仲治7連隊称号を授与)
	2月21日	第3軍団(第526軍部隊)管下区分隊攻撃戦術演習(首都周辺)
	2月22日	航空・反航空軍(空軍)および第11軍団(第630軍部隊)飛行訓練
	2月25日	砲兵火力打撃訓練

	3月7日	長在島・茂島防衛軍部隊(西海岸)
	3月11日	月乃島防衛隊, 第4軍団管下第641軍部隊管下長距離砲兵区分隊(前線西南部)
	3月13日	第4軍団砲兵区分隊たちの実弾射撃訓練
	3月20日	超精密無人打撃機の対象物打撃および自走高射ロケット射撃訓練
	3月22日	第11軍団管下軍部隊(呉仲恰7連隊称号授与)
	3月23日	第11軍団管下第1973軍部隊管下2大隊(呉仲恰7連隊称号授与)
	3月24日	第1501軍部隊
	5月20日	第405軍部隊
	5月26日	第291軍部隊(海軍, 東海岸)
	6月2日	第5軍団(第549軍部隊)管下五城山哨所と第63歩兵師団(第507軍部隊), 第785軍部隊監視所(前線中部)
	6月18日	第1017軍部隊飛行訓練
	6月30日	第8歩兵師団(第851軍部隊) 砲射撃訓練
	8月1日	航空陸戦兵強化訓練
	8月17日(報道日)	第3404軍部隊
	8月24日	新たに建造された戦闘艦船の機動訓練
	9月2日	長在島防衛隊, 茂島英雄防衛隊(西海岸)
	9月3日	月乃島防衛隊(西海岸)
	10月11日(報道日)	新たに建造された戦闘艦艇機動訓練
	11月20日(報道日)	金正日軍事研究院
	11月30日	軍第991軍部隊訪問(空軍)
2014年	1月12日	後方総局(第534軍部隊)指揮部
	1月18日	第323軍部隊(航空陸戦旅団)戦術訓練
	3月7日	第2620軍部隊(空軍, 呉仲恰7連隊称号授与)
	3月9日	金日成政治大学
	3月12日(報道日)	軍事学校教職員射撃競技
	3月17日(報道日)	軍種・軍団級単位指揮成員たちの射撃競技
	3月17日(報道日)	第188軍部隊(空軍, 呉仲恰7連隊称号授与)
	3月19日(報道日)	金正淑海軍大学と金策航空軍大学教職員の射撃競技
	4月1日	三池淵で白頭地区革命戦跡地踏査行軍に参加した人民軍連合部隊指揮官を鼓舞激励
	4月15日	人民軍第1次飛行士大会
	4月21日	第188軍部隊(空軍)
	4月24日(報道日)	第8歩兵師団(第851軍部隊) 管下女性放射砲兵区分隊砲射撃訓練

	4月25日	第1軍団管下第681軍部隊管下砲兵区分隊砲射撃訓練
	4月26日	主要敵対象物打撃任務担当長距離砲射撃区分隊訓練
	5月9日	人民軍航空・反航空軍飛行指揮成員たちの戦闘飛行術競技大会
	6月13日	麗島防御隊(東海岸)
	6月14日(報道日)	東海艦隊第863軍部隊
	6月16日(報道日)	東海艦隊第167軍部隊
	6月30日	花島防御隊(東海岸)
	7月2日(報道日)	海軍指揮成員たちの水泳能力判定訓練
	7月5日(報道日)	陸海空軍島上陸戦闘訓練
	7月7日(報道日)	熊島防御隊(東海岸)
	7月9日	西部前線打撃部隊の戦術ロケット発射実験
	7月14日	第171軍部隊直属民警哨所と軍部隊管下2大隊3中隊哨所砲実弾射撃訓練
	7月26日	戦略軍ロケット発射訓練
	8月14日	戦術ロケット弾試験発射(東海岸)
	8月27日～29日	人民軍第323軍部隊(航空陸戦旅団), 第162軍部隊(航空陸戦旅団), 第252軍部隊(海軍陸戦兵)管下区分隊, 第858軍部隊(空軍)の降下・対象物打撃実動訓練
	10月19日(報道日)	第1017軍部隊, 第458軍部隊の離着陸飛行訓練
	10月24日(報道日)	第3軍団(第526軍部隊)と第109タンク部隊(第478軍部隊)の双方実動訓練
	10月30日(報道日)	第1017軍部隊, 第60追撃機連隊(第447軍部隊), 第458軍部隊の検閲飛行訓練
	11月21日(報道日)	第991軍部隊(空軍, 両江道)
	11月23日(報道日)	海軍司令部(第572軍部隊)と第11軍団(第630軍部隊)の連合協同訓練
	11月28日(報道日)	女性追撃機飛行士飛行訓練
	12月1日	護衛司令部(第963軍部隊)直属砲兵中隊
	12月5日(報道日)	第1313軍部隊(呉仲治7連隊称号授与)
	12月8日(報道日)	第458軍部隊(空軍)
	12月13日(報道日)	第189軍部隊(海軍, 西海)
	12月30日(報道日)	第8歩兵師団(第851軍部隊)管下女性放射砲区分隊砲射撃訓練
2015年	1月7日(報道日)	第1軍団, 第2軍団, 第5軍団の第1梯隊歩兵師団直属区分隊の無反動砲射撃競技大会
	1月13日(報道日)	航空・反航空軍指揮部(空軍指揮部)
	1月24日(報道日)	第1航空・反航空師団管下追撃機・爆撃機連隊の飛行戦闘訓練

	1月27日(報道日)	西部前線機械化打撃集団装甲歩兵区分隊の冬季渡河攻撃演習
	1月31日(報道日)	空軍戦闘飛行連隊と海軍潜水艦連合部隊による敵海上目標に対する軍種打撃訓練
	2月6日	東海艦隊第155軍部隊による新型艦対艦ミサイル試験発射
	2月20日	第4軍団管下砲兵部隊, 区分隊による島火力打撃・占領のための演習
	3月2日	第60追撃機連隊(第447軍部隊, 呉仲治7連隊称号授与)
	3月9日(報道日)	第1016軍部隊(空軍, 呉仲治7連隊称号授与)
	3月12日(報道日)	第10軍団(前・第1地区司令部)新島防衛中隊(東海岸)
	3月20日(報道日)	第1航空・反航空師団と第5飛行師団管下追撃機, 襲撃機, 爆撃機連隊による飛行場打撃・復旧訓練視察
	4月4日(報道日)	第164軍部隊(海軍)
	5月8日	戦略潜水艦弾道弾水中試験発射
	5月24日(報道日)	第9軍団(第264軍部隊)指揮部
	6月13日(報道日)	高射砲兵軍官学校
	6月14日	東海艦隊(第597軍部隊)による新型艦対艦ミサイル発射訓練
	6月16日(報道日)	第10軍団(前:第1地区司令部)管下地上砲兵区分隊と海軍東海艦隊の各種艦船による夜間海上火力打撃訓練
	6月18日(報道日)	航空・反航空軍(空軍), 護衛司令部(第963軍部隊), 第3軍団(第526軍部隊)管下高射砲兵中隊と高射砲兵軍官学校中隊による高射砲兵射撃競技
	6月21日	女性超音速戦闘機42号飛行士の飛行訓練
	7月28日	人民軍航空・反航空軍指揮員戦闘飛行競技大会2015
	10月16日(報道日)	第350軍部隊
	11月3日(報道日)	西部前線反航空部隊の高射ロケット射撃訓練
	12月21日	新浦港付近で潜水艦弾道弾水中試験
	12月24日(報道日)	第3軍団(第526軍部隊)と第425機械化師団(第671軍部隊)間の双方実動訓練
2016年	1月4日	第91首都防衛軍団(第966軍部隊), 第1軍団(第313軍部隊), 第2軍団(第567軍部隊), 第3軍団(第526軍部隊), 第4軍団(第233軍部隊), 第5軍団(第549軍部隊), 第7軍団(第324軍部隊), 第8軍団(第593軍部隊), 第10軍団(第287軍部隊, 前:第1地区司令部)管下の砲兵区分隊による砲射撃競技
	1月10日(報道日)	人民武力部
	2月21日(報道日)	第91首都防衛軍団, 第105タンク師団, 第425機械化歩兵師団, 第815機械化歩兵師団管下部隊による双方実動訓練
	2月21日(報道日)	第1017軍部隊, 第60追撃機連隊(第447軍部隊), 第458軍部隊の検閲飛行訓練
	2月27日(報道日)	新たに開発された反タンク誘導武器試験射撃

	3月3日	新型大口径放射砲試験射撃
	3月9日	核弾頭搭載事業
	3月10日	戦略軍弾道ロケット発射訓練
	3月11日(報道日)	人民軍タンク兵競技大会—2016
	3月15日(報道日)	弾道ロケット大気圏再突入環境試験
	3月20日(報道日)	東海艦隊の水上艦船と狙撃兵, 第2航空師団管下追撃機, 第7軍団砲兵区分隊, 第108機械化歩兵師団の一部による上陸・反上陸防衛演習
	3月21日	新型大口径放射砲射撃
	3月24日(報道日)	大出力固体ロケット発動機地上噴出および階段分離試験
	3月24日	前線大連合部隊長距離砲兵隊集中火力打撃演習
	4月1日	新型反航空邀撃誘導武器体系戦闘性能判定試験射撃
	4月9日(報道日)	西海衛星発射場で大陸間弾道ロケット大出力発動機地上噴出試験
	4月12日(報道)	第3軍団(第526軍部隊)と第10軍団(第287軍部隊, 前:第1地区司令部)による対夜間奇襲上陸撃破実弾射撃訓練
	4月23日	戦略潜水艦弾道弾水中試験発射
	6月13日(報道日)	国防総合大学
	6月22日	地对地中長距離戦略弾道弾「火星—10」試験発射(咸鏡南道金野郡虎島里付近)
	7月19日	戦略軍火星砲兵部隊たちの弾道ロケット発射訓練
	8月24日	戦略潜水艦弾道弾水中試験発射
	9月5日	戦略軍火星砲兵部隊たちの弾道ロケット発射訓練(黄海南道銀泉郡兩潭里付近)
	11月4日(報道日)	作戦総局(第525軍部隊)直属特殊作戦大隊
	11月9日(報道日)	第1344軍部隊管下区分隊
	11月11日(報道日)	第4軍団麻蛤島防衛隊(前線西南部)
	11月12日	第4軍団葛利島前哨基地, 長在島防衛隊(前線西南部)
	11月16日(報道日)	大連合部隊別女性放射砲兵射撃訓練競技
	11月25日(報道日)	第12軍団(第380軍部隊)指揮部
	11月26日(報道日)	第1045軍部隊管下山岳歩兵大隊スキー訓練
	12月1日	前線砲兵部隊の砲兵隊集中火力打撃演習
	12月4日(報道日)	航空・反航空軍飛行指揮成員戦闘飛行術競技大会2016
	12月11日(報道日)	作戦総局(第525軍部隊)直属特殊作戦大隊の戦闘訓練
	12月21日(報道日)	大連合部隊別放射砲中隊射撃競技
	12月21日(報道日)	キル・ヨンジョ英雄追撃機連隊の夜間襲撃戦闘訓練
2017年	1月19日(報道日)	第4軍団(第233軍部隊)直属区分隊(前線西南部)
	1月22日(報道日)	第1314軍部隊(前線西南部)

	1月28日(報道日)	タンク装甲歩兵連隊冬季渡河攻撃演習
	2月12日	中長距離弾道弾「北極星-2」型試験発射(平安北道鉄山郡起峰里)
	3月1日	第91首都防衛軍団(第966軍部隊)指揮部
	3月6日	戦略軍火星砲兵部隊の弾道ロケット発射訓練(平安北道鉄山郡東林里)
	3月18日	新たに開発された大出力発動機地上噴出試験
	4月1日(報道日)	タンク兵競技大会2017
	4月13日(報道日)	作戦総局(第525軍部隊)直属特殊作戦大隊, 第11軍団(第630軍部隊)第2625軍部隊管下5支隊4打撃隊, 第252軍部隊(海軍陸戦兵)管下1支隊2打撃隊, 航空・反航空軍第323軍部隊(航空陸戦旅団)管下1支隊1打撃隊などによる特殊作戦部隊江河・対象物打撃大会2017
	4月25日	建軍85周年慶祝軍種合同打撃示威(前線東部)
	5月5日(報道日)	第4軍団管下長在島防衛隊, 茂島英雄防衛隊(前線西南部)
	5月14日	新型の地对地中長距離戦略弾道ロケット「火星-12」型試験発射(平安北道東林郡保聖里付近)
	5月21日	地对地中長距離戦略弾道弾「北極星-2」型試験発射(平安南道安州市延豊里付近)
	5月27日	新型反航空邀撃誘導武器体系試験発射(北倉飛行場)
	5月29日	精密操縦誘導体系を導入した弾道ロケット試験発射(元山市明沙十里洞)
	6月5日(報道日)	航空・反航空軍飛行指揮成員の戦闘飛行術競技大会2017
	6月8日	新型地对艦巡航ミサイル試験発射(江原道文川市参洞里柳九未里付近)
	7月4日	大陸間弾道弾「火星-14」型試験発射(平安北道泰川郡来賀里付近)
	7月28日	大陸間弾道弾「火星-14」型2次試験発射(西北部地帯)
	8月14日	戦略軍司令部
	8月26日(報道日)	島占領のための人民軍特殊作戦部隊対象物打撃競技
	8月29日	戦略軍中長距離戦略弾道ロケット試験発射訓練(順安飛行場)
	9月3日(報道日)	核武器兵器化事業
	9月15日	中長距離戦略弾道ロケット「火星-12」型発射訓練(順安飛行場)
	11月29日	大陸間弾道弾「火星-15」号発射(平壤郊外)
2018年	6月30日	第1524軍部隊
	11月16日(報道日)	新たに開発された尖端戦術武器試験
2019年	2月8日	人民武力省
	4月16日	第1017軍部隊(空軍)飛行訓練(順安飛行場)

	4月17日	新型戦術誘導武器射撃試験
	5月4日	東海岸前線および東部前線防衛部隊の火力打撃訓練(咸鏡南道金野郡虎島半島)
	5月9日	西海岸前線および西部前線防衛部隊の火力打撃訓練
	7月25日	新型戦術誘導武器威力示威射撃
	7月31日	新型大口径操縦放射砲試験射撃
	8月2日	新型大口径操縦放射砲試験射撃
	8月6日	新型戦術誘導弾威力示威発射
	8月10日	新武器試験射撃(咸鏡南道楽園郡呂湖里付近)
	8月16日	新武器試験射撃(江原道通川郡洞庭湖付近)
	8月24日	新たに研究開発された超大型放射砲試験射撃(宣徳飛行場)
	9月10日	超大型放射砲試験射撃(价川飛行場)
	11月16日(報道日)	航空・反航空軍飛行指揮成員戦闘飛行術競技大会2019
	11月18日(報道日)	航空・反航空軍狙撃兵区分隊の降下訓練
	11月25日(報道日)	昌熙島防衛隊(前線西南部)
	11月25日(報道日)	第5492軍部隊管下女性中隊(前線西南部)
2020年	11月28日	超大型放射砲試験射撃(塩浦飛行場)
	3月2日	前線長距離砲兵区分隊の砲撃訓練
	3月9日	前線長距離砲兵区分隊の砲撃訓練
	3月12日	第7軍団と第9軍団管下砲兵部隊の砲撃対抗競技
	3月20日	第3軍団, 第4軍団, 第8軍団管下の砲兵部隊による砲撃対抗競技
	3月21日	戦術誘導兵器の師範射撃
	4月10日(報道日)	軍団別迫撃砲兵区分隊の砲撃訓練
	4月12日(報道日)	西部地区航空・反航空軍師団傘下迫撃襲撃機連隊(第1017軍部隊)

(出所)『労働新聞』などにより筆者作成。

そのひとつが空挺部隊の降下作戦である。落下傘に関しては、すでに各地に飛行機の操縦や落下傘訓練を行う航空クラブが組織されていることが知られており、軍隊でも降下訓練は行われていたはずであるが、それが公開されることはなかった。金正恩は2013年2月20日に第323軍部隊（航空陸戦旅団）を視察し、翌2014年1月18日にこの軍部隊の夜間訓練を指導したのを皮切りに、降下作戦の指導に積極的になった。2014年8月27日～29日に、人民軍第323軍部隊（航空陸戦旅団）、第162軍部隊（航空陸戦旅団）、第252軍部隊（海軍陸戦兵）管下の区分隊と区分隊の陸戦兵たちと第858軍部隊（飛行部隊）による降下・対象物打撃実動訓練を指導した（『労働新聞』2014年8月23日；2014年8月30日）。『労働新聞』2016年11月4日は金正恩が作戦総局（第525軍部隊）直属特殊作戦大隊による障害物克服訓練および打撃術総合訓練、射撃訓練、超低空降下訓練、ヘリ・ロープ降下訓練、襲撃訓練を指導したこと、『労働新聞』2016年12月11日は金正恩がその大隊による韓国大統領府を模した建物を襲撃する訓練を指導したことを報じた。そして、『労働新聞』2019年11月18日は金正恩が航空陸戦旅団（第162軍部隊）をはじめとする空軍の狙撃兵区分隊の降下訓練を指導したことを報じた。

もうひとつは上陸作戦である。これまで朝鮮は韓米合同演習で実施される上陸訓練を強く非難する一方で、自己の上陸訓練について報じたことはなかった。2013年3月25日には第7軍団（第324軍部隊）、第1地区司令部（第287軍部隊）、東海艦隊（第597軍部隊）による上陸・反上陸訓練が金正恩の指導のもとに実施された（『労働新聞』2013年3月26日）。そして『労働新聞』2014年7月5日は金正恩が陸海空軍による島嶼部上陸訓練を指導したことを報じ、『労働新聞』2014年11月23日は金正恩が海軍司令部（第572軍部隊）と特殊作戦軍の第11軍団（第630軍部隊）による上陸・反上陸訓練を指導したことを報じ、さらに『労働新聞』2016年3月20日は金正恩が第7軍団砲兵区分隊、第108機械化歩兵師団の一部、東海艦隊の水上艦船、第2航空師団追撃機による上陸・反上陸訓練を指導したことを報じた。

これらの攻撃性の強い作戦訓練に関する報道は、金正恩時代に入ってから、抑止という考え方が核戦力のみならず、通常兵器による戦闘に関しても適用されていることを示している。そして、2021年1月5日～12日に開かれた第8次党大会では、「国防科学技術発展および武器体系開発5カ年計画」が採択され、核技術の高

度化，核兵器の小型・軽量化，戦術核兵器化，大陸間弾道弾の命中率向上，原子力潜水艦の保有，軍事偵察衛星の運営などの目標に向かって進むことになった（『労働新聞』2021年9月13日）。

2021年には金正恩の動静に関する公式報道のなかに部隊訪問がみられなかった。しかし，これは金正恩の関心が個々の軍部隊の状況に関することよりも，各種のミサイル開発と配備に移ってきたことによるものであった。実際に，2021年から2022年にかけて各種ミサイルの発射が実施され，2022年3月24日には新たな大陸間弾道弾「火星砲-17」が発射された。それとともに2022年から金正恩はミサイル試験発射の参観または指導や発射訓練の指導に乗り出すようになり，空軍の訓練の指導など現地での活動を復活した。さらに2023年からはこれに偵察衛星の開発や水中で核爆発を起こしてそこで発生する津波で目標を攻撃する水中攻撃型兵器の開発に関する金正恩の現地指導が加わった（表6-2）。

表6-2 ミサイル発射と金正恩の核およびミサイル関連訓練指導(2021~2023年)

2021年	3月25日	新型戦術誘導弾試験発射
	9月11日	新型長距離巡航ミサイル試験発射
	9月12日	新型長距離巡航ミサイル試験発射
	9月15日	鉄道軌道ミサイル連隊による検閲射撃訓練
	9月28日	新たに開発された極超音速ミサイル「火星-8」試験発射
	2022年	1月5日
1月11日		金正恩、極超音速ミサイル試験発射を参観
1月14日		平安北道鉄道機動ミサイル連隊の実践能力判定のための検閲射撃訓練
1月17日		戦術誘導弾検収射撃試験
1月25日		長距離巡航ミサイル体系更新のための試験発射
1月27日		地上対地上戦術誘導弾の常用戦闘部威力確証のための試験発射
1月30日		地上対地上中長距離弾道ミサイル「火星-12」検収射撃試験
2月27日		偵察衛星開発のための「重要試験」
3月5日		偵察衛星開発のための「重要試験」
3月24日		金正恩、試験発射場を訪問して大陸間弾道ミサイル「火星砲-17」試験発射の全過程を直接指導
4月16日		金正恩、新型戦術誘導武器試験発射を参観
8月17日		巡航ミサイル発射
9月25日		金正恩が指導する人民軍戦術核運用部隊たちの軍事訓練実施の一環として、西北部貯水池水中発射場で戦術核弾頭搭載を模した弾道ミサイル発射訓練
9月28日		金正恩が指導する人民軍戦術核運用部隊たちの軍事訓練実施の一環として、戦術核弾頭搭載を模した弾道ミサイル発射訓練
9月29日		金正恩が指導する人民軍戦術核運用部隊たちの軍事訓練実施の一環として、各種の戦術弾道ミサイル発射訓練
10月1日		金正恩が指導する人民軍戦術核運用部隊たちの軍事訓練実施の一環として、各種の戦術弾道ミサイル発射訓練
10月4日		金正恩が指導する人民軍戦術核運用部隊たちの軍事訓練実施の一環として、新型地上対地上中長距離弾道ミサイル発射訓練
10月6日		金正恩が指導する人民軍戦術核運用部隊たちの軍事訓練実施の一環として、超大型放射砲と戦術弾道ミサイルの命中打撃訓練
10月6日		金正恩の現地指導のもと、西部前線長距離砲兵区分隊たちと西部地区空軍飛行隊たちの合同打撃訓練
10月8日		金正恩の現地指導のもと、史上初の150余機の各種戦闘機の同時出撃による大規模航空攻撃総合訓練
10月9日	金正恩が指導する人民軍戦術核運用部隊たちの軍事訓練実施の一環として、超大型放射砲射撃訓練	

	10月12日	金正恩、長距離戦略巡航ミサイル試験発射を現地で指導
	11月2日	韓米連合空中訓練「ヴィジラントストーム」に対する対応軍事訓練の一環として、平安北道地域のミサイル部隊が戦術弾道ミサイル発射、西海岸沿線の空軍反航空ミサイル兵部隊が地上対空中ミサイルを発射、咸鏡北道地域から戦略巡航ミサイルを発射
	11月3日	韓米連合空中訓練「ヴィジラントストーム」に対する対応軍事訓練の一環として、「重要な弾道ミサイル」試験発射、超大型放射砲弾と各種戦術弾道ミサイル、長距離放射砲弾を発射
	11月4日	韓米連合空中訓練「ヴィジラントストーム」に対する対応軍事訓練の一環として、500機の各種戦闘機を動員して空軍の大規模な総戦闘出動作戦
	11月5日	韓米連合空中訓練「ヴィジラントストーム」に対する対応軍事訓練の一環として、戦術弾道ミサイルと超大型放射砲弾を発射
	11月18日	金正恩、平壤国際空港で新型大陸間弾道ミサイル「火星砲-17」の試験発射を現地指導
	12月15日	金正恩、西海衛星発射場で朝鮮初となる推進力140トンフォースの大出力固体燃料発動機の地上噴出試験を現地指導
	12月18日	西海衛星発射場で偵察衛星開発のための最終段階の重要試験
2023年	2月18日	大陸間弾道ミサイル「火星砲-15」発射訓練
	2月23日	東部地区戦略巡航ミサイル部隊該当火力区分隊による戦略巡航ミサイル「ファサル-2」発射訓練
	3月9日	金正恩、人民軍西部前線の軍部隊管下第8火力襲撃中隊を現地指導
	3月12日	潜水艦「8・24英雄艦」による戦略巡航ミサイル水中発射訓練
	3月14日	西部前線の人民軍ミサイル部隊管下第11火力襲撃中隊による地上対地上戦術弾道ミサイル示範発射訓練
	3月16日	金正恩、大陸間弾道ミサイル「火星砲-17」発射訓練を指導
	3月18日～19日	金正恩、核反撃仮想総合訓練を指導
	3月21日～23日	金正恩、新たな水中攻撃型兵器システム「ヘイル-1」試験を指導
	3月22日	金正恩、戦略巡航ミサイル部隊の戦略巡航ミサイル「ファサル-1」と「ファサル-2」の発射訓練を指導
	3月25日～27日	水中攻撃型兵器システム「ヘイル-1」試験
	3月27日	中部前線のミサイル部隊管下区分隊の地上対地上戦術弾道ミサイル核空中爆発の示範教育射撃訓練
	4月4日～7日	水中攻撃型兵器システム「ヘイル-2」試験
	4月13日	金正恩、新型大陸間弾道ミサイル「火星砲-18」型の初の試験発射を現地指導
	4月18日	金正恩、偵察衛星開発に関して国家宇宙開発局(現：国家航空宇宙技術総局)を現地指導

5月16日	金正恩、偵察衛星発射準備委員会事業を現地指導
5月31日	平安北道鉄山郡西海衛星発射場で軍事偵察衛星「万里鏡-1」号を新型衛星運搬ロケット「千里馬-1」に搭載して発射、発射体は墜落
7月12日	金正恩、新型大陸間弾道ミサイル「火星砲-18」試験発射を指導
8月21日(報道日)	金正恩、人民軍海軍東海艦隊近衛第2水上艦戦隊を視察、戦略巡航ミサイル発射訓練を参観
8月27日	金正恩、海軍司令部を訪問
8月2日	金正恩、人民軍総参謀部訓練指揮所を訪問
8月30日	人民軍西部地区戦術核運用部隊、韓米連合攻撃編隊訓練に対応して、仮想の戦術核打撃訓練、戦術弾道ミサイルを発射
9月2日	人民軍西部地区戦略巡航ミサイル運用部隊、長距離戦略巡航ミサイルを発射
9月6日~7日	金正恩、烽台潜水艦工場で新たに建造された戦術核潜水艦進水式に参加
11月11日	中距離弾道ミサイル用大出力固体燃料発動機開発の第1階段発動機の地上噴出試験
11月14日	中距離弾道ミサイル用大出力固体燃料発動機開発の第2階段発動機の地上噴出試験
11月21日	金正恩、平安北道鉄山郡西海衛星発射場で新型衛星運搬ロケット「千里馬-1」号に搭載された偵察衛星「万里鏡-1」号の発射を参観、国家航空宇宙技術総局平壤総合管制所を訪問
11月24日	金正恩、国家航空宇宙技術総局平壤総合管制所を訪問
11月25日	金正恩、国家航空宇宙技術総局平壤総合管制所を訪問
11月30日	金正恩、空軍司令部と第1空軍師団を訪問
12月18日	金正恩、大陸間弾道ミサイル「火星砲-18」型発射訓練を参観

(注) 韓国や日本で「ミサイル発射」として捕捉されたものであっても、朝鮮側で公式発表されていないものは除く。

(出所) 『労働新聞』などにより筆者作成。

2 指揮官に対する統制の強化

2代目最高指導者の金正日は軍隊首脳部の人事を動かすことを避けていた。1995年10月に人民軍総参謀長に就任した金永春は2007年3月まで11年5カ月の間その職位にあった。同じく1995年10月に総政治局長に就任した趙明禄も2009年2月まで13年4カ月の間その職位にあった。1998年9月に人民武力相に就任した金一哲も2009年2月まで10年5カ月の間その職にあった。

これに対して、金正恩時代に入ると、軍隊首脳部の頻繁な交代が行われるようになった。表6-3～表6-5はそれぞれ軍隊全般の作戦指揮を担当する人民軍総参謀長、軍隊内の政治統制を担当する人民軍総政治局長、軍隊の行政を担当する人民武力部長（2016年7月に人民武力部が人民武力省に改編されたのに伴って人民武力相に改称、2021年1月に人民武力省が国防省に改編されたのに伴って国防相に改称）の在任期間と前職および異動先を示したものである。

人民軍総参謀長の場合、李英浩が約3年5カ月間、玄永哲は約9カ月間、金格植は約2カ月間、李永吉は約2年4カ月間、李明洙は約2年2カ月間、李永吉は復帰して約1年2カ月間、朴正天は約1年10カ月間、林光日は約8カ月間、李泰燮は約7カ月、朴秀一は約8カ月間であった（表6-3）。人民軍総政治局長の場合、崔龍海が約2年間、黄炳瑞が約3年5カ月間、金正閣が約2カ月間、金秀吉が約2年5カ月間、権英進が1年3カ月間であった（表6-4）。人民武力部長（人民武力相、国防相）も、それぞれの在任期間をみると、金永春が約3年2カ月間、金正閣が約6カ月間、金格植が約6カ月間、張正南が約1年1カ月間、玄永哲が約10カ月間、朴英植が約2年9カ月間、努光哲が約1年6カ月間、金正官が約1年8カ月間、李永吉は約1年間であった（表6-5）。

うち3年間以上の在任期間であった李英浩と金永春はいずれも金正日時代に就任しており、金正恩時代に限ってみると、在任期間はそれぞれ7カ月、4カ月にとどまる。そのため金正恩が指導者に就任してから軍首脳部のポストに3年以上在任していた者は黄炳瑞1人ととどまる。そして、懲罰的な解任とみられる李英浩人民軍総参謀長と玄永哲人民武力部長のケースや健康状態による引退と思われる金格植人民軍総参謀長と金正閣人民軍総政治局長のケース、異動先が不明な林光

表6-3 金正恩時代の歴代人民軍総参謀長

	在任期間 (在職が確認される期間)	前職	異動先
李英浩	2009年2月～2012年7月	平壤防衛司令官	すべての職務から解任
玄永哲	2012年7月～2013年4月	第8軍団長	第5軍団長, 人民武力部長, 2015年4月失脚
金格植	2013年5月～2013年7月	人民武力部長	引退推定(2015年5月死去)
李永吉	2013年8月～2016年1月	第5軍団長	第1副総参謀長兼作戦総局長
李明洙	2016年2月～2018年4月	人民保安部長	最高司令部第1副司令官
李永吉	2018年6月～2019年8月	第1副総参謀長兼作 戦総局長	党中央委員会第1副部長
朴正天	2019年9月～2021年7月	副総参謀長兼火力指 揮局長	党中央委員会政治局常務委員 兼秘書
林光日	2021年9月～2022年4月	総参謀部偵察総局長	不明
李泰燮	2022年6月～2022年12月	社会安全相	社会安全相
朴秀一	2022年12月～2023年8月	社会安全相	不明
李永吉	2023年8月～	党中央軍事委員会副 委員長	現職

(出所)『労働新聞』などにより,筆者作成。

表6-4 金正恩時代の人民軍総政治局長

	在任期間 (在職が確認される期間)	前職	異動先
崔龍海	2012年4月～2014年4月	党中央委員会秘書	党中央委員会秘書
黄炳瑞	2014年5月～2017年10月	党中央委員会組織指 導部副部長	党中央委員会組織指導部第1 副部長
金正閣	2018年2月～18年4月	総政治局第1副局長 (～2012年3月), 人 民武力部長(～2012 年10月), 以後未詳	引退推定
金秀吉	2018年5月～2020年10月	総政治局組織副局長 (～2014年10月) 平壤市党委員長 (～2018年4月)	江原道党責任秘書
権英進	2021年1月～2022年4月	不明	不明
鄭京沢	2022年6月～	国家保衛相	現職

(出所)『労働新聞』などにより,筆者作成。

表6-5 金正恩時代の人民武力部長(人民武力相, 国防相)

	在任期間 (在職が確認される期間)	前職	異動先
金永春	2009年2月～2012年4月	総参謀長(～2007年2月), 国防委員会副委員長(2007年4月～, 2009年2月から人民武力部長兼任)	党中央委員会部長
金正閣	2012年4月～2012年10月	総政治局第1副局長	18年2月まで未詳。以後、総政治局長
金格植	2012年10月～2013年4月	第4軍団長	総参謀長
張正南	2013年5月～2014年6月	第1軍団長	第5軍団長
玄永哲	2014年6月～2015年4月	総参謀長(～13年4月), 第5軍団長	失脚
朴英植	2015年7月～2018年4月	総政治局組織副局長	不明
努光哲	2018年6月～2019年12月	人民武力部第1副部長	不明
金正官	2020年1月～2021年9月	人民武力省副相	国防省第1副相
李永吉	2021年12月～2022年12月	党第1副部長	党秘書
姜順南	2022年12月～	第415機械化歩兵師団長(2015年12月), 人民武力省副相(～2018年10月), 党民防部長	現職

(出所)『労働新聞』などにより, 筆者作成。

日人民軍総参謀長, 朴秀一人民軍総参謀長, 朴英植人民武力部長(人民武力相), 努光哲人民武力相, 権英進人民軍総政治局長を除くと, 異動先は軍団長または同等の職務になっており, 人民軍総参謀長のポストを一度離れて2年5カ月後に舞い戻り, 1年2カ月間務めてから離れてまた3度目に戻ってきた李永吉のケースもある。李永吉はその後国防相にも就いた。これは多くの異動が, 1人の人物を同じポストに長くおかないようにすることや他の部署を経験させることを意図的にねらったものであることを示している。

前職および異動先に関しては, 総政治局長のポストに関して, 崔龍海と黄炳瑞は党中央委員会から来て党中央委員会に戻っている。これは, 人民軍総政治局が党中央委員会の直属機関という位置づけにあることと関連しており, 党による軍隊での政治教育, 思想統制および指揮官の監視の機能が健全であることを意味している。また, 呉仲治7連隊称号争取運動などの軍隊内での大衆運動は金正恩時

代に入ってから『労働新聞』の記事のなかにみられることから、党中央委員会の組織指導部や宣伝煽動部の影響力も健在であることが確認される（『労働新聞』2016年9月22日）。

軍隊首脳部の頻繁な異動と並行して、金正恩による指揮官たちへの直接的な影響力の行使も行われている。金正恩は、2014年3月に自身の目の前で軍種および軍団級や師団級の指揮官たちに射撃競技をさせ、4月には管下砲大隊が抜き打ち訓練にうまく対応できなかった前線東部の第1軍団に対して、軍団長の降格などの処分を下した（『労働新聞』2014年3月17日; 2014年4月26日）。さらに、金正恩は7月に西海艦隊と東海艦隊のすべての指揮官たちに、高齢者を含めて隊列をなして5キロメートルの距離を往復する遠泳競技をさせたりもした（『労働新聞』2014年7月2日）。

まとめ

2代目最高指導者の金正日と3代目最高指導者の金正恩との軍事に関する政策および軍隊に対する影響力の及ぼし方は大きく異なる。

核武装化は金正日時代の選択であったが、当時は核兵器がアメリカの攻撃に対する抑止力として機能するためのプロセスにはほとんど関心が払われなかった。この点では金正恩は軍隊の生活と教育を経たこともあり、その必要性を認識していたことは間違いない。3代目就任直後から核爆弾を武器化することや運搬手段の開発を可視化することが進められるようになった。それとともに降下作戦や上陸作戦など通常兵器による戦闘能力も可視化するようになってきた。

2代目と3代目のまたひとつの違いは軍隊に対する影響力の及ぼし方にある。金正日が軍隊に関してはおもに政治教育や政治思想、大衆運動を通じて影響力を及ぼしてきたのに対して、3代目最高指導者の金正恩は主として軍隊の作戦指揮のラインから直接、指揮官に影響力を及ぼしている。

これまで知られているところの金正恩の軍事に関連する行動を観察した限りでは、金正恩の関心はおもに、抑止力を強化するために軍事力を可視化することと、見栄えのする装備や能力を構築することにあるようである。軍隊首脳部の頻繁な

人事異動がみられることについては、一部には単に気に入らない幹部の首をすげかえているために起こっていることもあろうが、基本的には指揮官に同一部署に長く就くことによるマンネリ化を防止すること、他部署での経験を積ませることにあると判断される。とくに野戦歩兵での経験しかない幹部にとっては、核武装化の時代に入って可視化するに足る軍事力をいかに構築していくかという課題があるはずである。

一方で、金正恩は金正日時代に進められた軍隊と軍人を革命の模範、社会の模範にすることに關しては、さほど高い関心を示していないようにみえる。しかしこのことは、これまでに形成された軍隊に対する政治統制の仕組みと機能が軽視されていることを意味しない。党のいうことをよく聞く軍隊を維持することや軍隊を見栄えのするものにしていくことに、金日成と金正日の時代を経て形成された政治統制制度が必要であることは3代目も十分理解しているはずである。

【文献目録】

〈日本語文献〉

- 朴正鎮 [パク・ジョンジン] 2015.『北朝鮮における安全保障』木宮正史編『朝鮮半島と東アジア』岩波書店。
- 道下徳成 2013.『北朝鮮 瀬戸際外交の歴史——1966～2012年』ミネルヴァ書房。
『朝日新聞』。
『朝鮮新報（日本語版）』。

〈朝鮮語文献〉

- 『김정일선집 [金正日選集] (各巻)』평양 [平壤], 조선로동당출판사 [朝鮮労働党出版社]。
『로동신문 [労働新聞]』평양 [平壤], 로동신문사 [労働新聞社]。
『조선중앙통신 [朝鮮中央通信]』, 평양 [平壤], 조선중앙통신사 [朝鮮中央通信社]。

〈英語文献〉

- United States. President 2015. *National Security Strategy*. The White House.
—— 2017. *National Security Strategy of the United States of America*. The White House.

©Masahiko Nakagawa 2025

本書は「クリエイティブ・コモンズ・ライセンス表示4.0国際」の下で提供されています。
<https://creativecommons.org/licenses/by/4.0/deed.ja>

